

目次：

- ・創刊に向けてー2024年の抱負
- ・農場だより
- ・10年前の今頃
- ・あとがきー2月の予定

・創刊に向けてー2024年の抱負

2024年も1か月が過ぎました。本当に時間の経つのが早いと実感しています。年齢のせいもあるかも知れませんが、やらなければならないことが多すぎます。ある意味、2024年はワイナリーとしての本格的なスタートになると考えています。第7回の事業再構築補助金により、プティマンサンの完全瓶内2次発酵スパークリングワイン醸造システムが新たに導入されます。3月末までにすべて納品予定となっています。気温が高く暑いという感じになる5月のリリースを予定しています。Tsukuba Vineyardの新しい商品を世に送り出す緊張感に包まれています。

2023年は高温続き、少雨の気象条件はブドウの収穫時期の重なりや収量の減少をもたらし、ブドウ品質自体は必ずしもベストという訳ではありませんでした。今年もその傾向は続くものと覚悟しています。このため、農場作業には、迅速に対処できるよう細心の注意を払いながら、集中した人手の確保を行わなければなりません。すでに3月上旬からの防除に向けて農薬の発注を済ませるなどの準備が行われています。

栽培から醸造・瓶詰までの一連のプロセスを体験できる貴重なオーナー制の導入や収穫時期の重なりを解消するための体験型ボランティアなどの導入もすでに検討課題として具体的準備に入っています。ほかのワイナリーでは実施できないような体験型の作業形態を取り込み、「良いブドウから良いワインを」目指して進みたいと思います。

Tsukuba Vineyardでブドウに直接触れる機会を利用して、自分で畑を借り、自分でブドウを植え始める人も増えています。近隣自治体だけでなく、Tsukuba Vineyardの近くの畑を借りてブドウ栽培をスタートさせる人が増えています。これらの方々と一緒に栗原地域がワイン用ブドウの一大生産地になることを夢見ています。このような意志を持っている方々との出会いを大事にしながら、相互の利益になるような工夫を重ねたいと思います。

・農場だより

1月、2月は本格的なせん定の時期です。基本は1芽残しで、第2節の真上で切ります。これを徹底して、できるだけ本体から離れない位置で結果母枝ができるようにとの考えです。展葉の時期になってみなければわからないのですが、根元の芽座から展葉する場合もあ

り、芽欠きの時期にどこの芽を残すのかを決めることになります。園全体のブドウがこの状態になるので、ある程度の取り忘れも仕方ないことです。この時期の重要な作業に穂木の確保があります。苗木屋さんには穂木を送り接ぎ木をしてもらう場合や、挿し木で欠損した部分の補充を行う必要があります、できるだけ素性の良い穂木を選定しなければなりません。一般には節間の短い、少しくねった枝で、しかも鉛筆よりも太い直径のものを選ぶようにしています。挿し木ができる気温が高くなる時期まで、土中にて養生します。



深さ40cm程度に掘った穴に直接穂木をおいて養生します。

・10年前の今頃

2015年7月8日に、茨城県の2010年代ワイン産業黎明期ともいえるイベントがつくば市役所にて開催されています。HPから抜粋して掲載してみます。10年前ということもあり、個々の具体的な事象の掘り下げはできていなく、おおざっぱな把握と意気込みを感じる内容です。

第1回いばらきワインサミット(茨城県内ワイン用葡萄生産者等連携会議)

平成27年7月8日 於:つくば市役所 (2015年)

ワイン用ブドウ生産者を中心に自治体行政職員や県議会議員、県農林水産部流通課、農業改良普及センターなどの専門員が参加し、総勢49名となりました。主宰者である県中小企業団体中央会・事務局長のあいさつに続き、主賓・県水産部アグリビジネス推進室長の挨拶があり、八千代ワインチャレンジ会・代表 西村さんから開催の趣旨説明がなされました。ブドウ栽培開始間もない生産者間の情報共有や醸造関係者、そしてワインの販売に関する問題までを共有できる場の提供が必要であることが強調されました。続いて、Tsukuba Vineyard・高橋が「茨城県でワイン葡萄が栽培できるか？」というタイトルで以下のような話を行いました。



Tsukuba Vineyard®

Mail Magazine 第1号

2024年2月

「全国的にワイン用ブドウ栽培、ワイン醸造への関心が高まり、自治体の強力なバックアップの元、多くの新規参入が実現している」として個々の現状について以下のように述べています。

- その結果国内ではワイン用ブドウの不足が、そして来年の苗木の入手が不可能になっている現実があること
- 自治体のテコ入れで、新規就農者やワイン塾の設立がブームとなっている
- シャトーカミヤの創始者である神谷傳兵衛が110年以上前に今の牛久市に23haのブドウを植え、醸造所を設立していること、関東平野の主な地質は同じような黒ボク土主体の地質であることから十分ブドウ栽培は可能、現に生食用を含めて栽培者は多数存在
- テロワールの違いの説明として甲府、土浦、余市の気温情報、日照情報を説明。もちろんワインの質はこれだけの条件では決まらないことも
- 北イタリア・パローロの地質露頭やブドウ畑の写真から関東平野における地質との大きさ差異について説明
- 宮崎県都農ワイナリーの現状を説明し、台風・大雨の環境ながら国内ワインコンペで数多くの入賞を果たしているのは、栽培技術の工夫があるからを説明
- これらこそがまさしくテロワールということになることを説明
- イタリア・パローロ、ウイーンのブドウ畑の状況をスライドにて示し、工夫次第では畑の設備費を低く押さえることが可能である

生産者に限って言えば、専門の指導者が存在し確立された技術力の中で栽培・醸造開始されている法人、3-4年経過してワインを販売している団体、そして私のように定植して間もない個人という3タイプに分類できるが、特に栽培技術に関する不安の問題が大きかったと思われる。県会議員、そして県の農林水産部の職員には、ワイン用ブドウ専門の普及員の配置をお願いしてきました。現在の普及センターでの養成ではなく、民間大手の会社から高給で引き抜くぐらいの人材を配置してもらいたいと要望しました。

[\(発表時の pp.file は HP で確認できます\)](#)

あとがき：

今までに Tsukuba Vineyard と関連して名刺交換をさせていただいた方、普段から農場などのお手伝いに来られている方、オーナー制会員だった方などなど、Tsukuba Vineyard の応援団として、あるいは興味を持ってくださる方へ、HP とは異なる視点から情報提示することを主眼に配布いたします。もし、今後このメールマガジンの配布が必要ない場合にはお

手数でも以下のアドレスに返信いただければと思います。

また、新たにワインやブドウ畑に興味のある方への転送や新規でのメルマガ配信登録を希望される場合にもメールを送信していただくと幸いです。



2025年5月リリース予定の瓶内2次発酵中のプティマンサン、1気圧を超えました。

今後の予定：

- ・ 2月17日 第5回ワニナルフェス出店（研究学園駅前公園）
[ワニナルプロジェクト | ワニナルフェス | \(waninaru-project.com\)](http://waninaru-project.com)
- ・ 2月25日 吉沼マルシェ出店
[吉沼マルシェ / つくば市公式ウェブサイト \(tsukuba.lg.jp\)](http://tsukuba.lg.jp)

* 本 Mail Magazine の受け取りや新規配信に関しては tsukubavineyard@gmail.com までご連絡をください。お待ちしております。